平福寺薬師如来〈へいふくじやくしにょらい〉の由来〈ゆらい〉（三田市青野）

いとしく思っていたお嫁〈よめ〉さんが、嫁〈よめ〉が淵〈ふち〉に身を投〈な〉げて死んでしまってからは、内神村の岡村久五郎〈おかむらきゅうごろう〉は毎日泣〈な〉き悲〈かな〉しんでいました。時には仏壇〈ぶつだん〉の前に坐〈すわ〉ってねんごろにお経〈きょう〉をあげ、ほとけの供養〈くよう〉をわすれませんでした。
それでも夕方〈ゆうがた〉になると、さびしさも増〈ま〉して来て久五郎は、お嫁さんの身なげした嫁が淵の岩鼻〈いわはな〉に立って、わにのように大きな口をひろげている黒ずんだ淵をながめて、自分も身を投げて死んでしまおうかと、何度〈なんど〉も思ったのでありました。

時代は天正〈てんしょう〉、織田信長〈おだのぶなが〉が天下統一〈とういつ〉の野望〈やぼう〉をいだいていた頃であります。
久五郎は、ある日ふと、なげしにかけてある槍〈やり〉を見て、自分も侍〈さむらい〉になりたいものだと思いました。
何かよい思案〈しあん〉がないかと考えましたが、百姓〈ひゃくしょう〉が侍になるということはなかなかむつかしいのです。
その頃、三田の下田中の天神山に立石城〈たていしじょう〉という城を築〈きず〉いて、その付近〈ふきん〉を領有〈りょうゆう〉している山崎左馬之介恒政〈さまのすけつねまさ〉という土豪〈どごう〉がおりました。恒政はその菩堤寺〈ぼだいじ〉を山崎の鼻〈はな〉に建立〈こんりゅう〉し、平福寺〈へいふくじ〉と名づけました。立派なお寺は出来たが、かんじんの本尊〈ほんぞん〉がありません。そこで、青野の千丈山正福寺〈せんじょうざんしょうふくじ〉の別堂〈べつどう〉にまつってある薬師如来をもらいうけてご本尊にしたいというので、お寺に何回となく使者〈ししゃ〉を立ててはなしをしましたが、寺はなかなかそのいうことをきいてくれませんでした。
山崎左馬之介恒政の重臣車瀬政右衛門〈くるませまさうえもん〉は、大へんおこって千丈山を焼き討ちにしてしまうとさえいい出しているというので、村々ではいろいろなうわさがながれました。

この話をきいた岡村久五郎は、さっそく家に代々伝〈つた〉わっている大小〈だいしょう〉を腰〈こし〉にさして、ひとりで千丈山へ登〈のぼ〉っていきました。そして
「わたくしは、山崎左馬之介恒政の家来〈けらい〉岡村久五郎と申〈もう〉すものである。前々から申出〈もうしで〉ている薬師如来〈やくしにょらい〉は、ただ山崎家に申しうけるのではない。千丈山から山崎家まで下〈お〉りて来られるのであって、お坊さんにしてもこの千丈山から来てもらって、お寺の好きなようにしてもらえばよいのである。いわば千丈山正福寺の発展〈はってん〉である。お寺の田地も十分につけるつもりである。
山崎家と、正福寺とがけんかしてお寺を焼き討ちにでもすると、高城山〈たかしろやま〉の波多野秀治〈はたのひでは る〉は縁〈えん〉つづきだというので、正福寺をたすけるであろうが、それも丹波のことだからむつかしい。心よく言うとおりにしてもらいたい。」
それは、それは、立〈た〉て板〈いた〉に水をながすように、すらすらとのべたてました。
お寺では、ついにおれて久五郎のいうとおりにすることにしました。そこでこんどは、久五郎は頭をまるめ衣〈ころも〉をつけてお坊さんの風〈ふう〉をして、山崎の立石城に乗りこみました。
「わたくしは、千丈山正福寺の使者である。いろいろと相談〈そうだん〉した結果〈けっか〉、かねがねお話の当山〈とうざん〉の薬師如来はこちらにさしあげることにきめた。そのかわりお寺が出来あがったからは、ここの平福寺の坊さんは全部〈ぜんぶ〉千丈山から来〈く〉ることにしてもらいたい。寺領〈じりょう〉も十分つけてもらいたい。」
久五郎がすじ道立てていうので、山崎家に何の反対〈はんたい〉の意見〈いけん〉もあるはずがありません。話は、岡村久五郎のちえでまたたくうちに円満〈えんまん〉にかたずきました。

寺の名は、長尾山平福寺といいます。この寺は明治のはじめまでつづいたが、とりこわしになってそのあとは遍明院〈へんめいいん〉というお寺となっています。
岡村久五郎は、百姓〈ひゃくしょう〉の出〈で〉であるが、学問はあるし話は上手〈じょうず〉で、とても頭のよい男で気品〈きひん〉も人にすぐれていたので、はじめのねがいどおりに侍になることが出来ました。山崎左馬之介恒政の家来〈けらい〉となって後には郡奉行〈こおりぶぎょう〉にまで出世〈しゅっせ〉しました。